０１／１１／１８　礼拝メッセージ　　岡田大輔　副牧師

主　　題：神が憎む愛
聖書箇所：第１ヨハネ　２章 15 節～１７節

神の属性の中で最も有名なものは「神は愛」、「愛なる神」です。聖書は確かにそう教えています。けれども、神様は愛される方であると同時に、憎む方でもあります。箴言 6 章 16 節から 19 節に、神様が忌み嫌う 7 つのものについて語られています。傲慢な目、偽る舌、殺す手、悪い心、有害な足、偽証する人、分裂をもたらす人です。

今朝、私たちは神様が憎むもう一つのもの――神様に向けられていない愛について、2 つのことを通して見ていきたいと思います。このヨハネの手紙は、本当に救われている者、本当のクリスチャンは一体どのようなものであるかを明確に示そうとして書かれたものです。その中で、ヨハネははっきりと愛なる神様は世を愛することを憎んでおられると教えています。

1.　ヨハネの命令　15 節

15 節の最初に「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。」とヨハネは命令します。ヨハネがこの手紙を通して、私たちは、神様と神の家族として受け入れられた兄弟姉妹たちを愛するように命じているわけです。律法の中でも一番大切なものは、神を愛することと隣人を愛することでした。

では一体世というのは何でしょう。

新約聖書の中に「世」という言葉は、何通りかに使われています。一番目は「被造物」です。実際にこの世に存在する神様に作られたもの、例えば山や川、海や植物や動物など、すべてのものです。詩篇 19 篇 1 節に「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざをつげ知らせる。」とあります。つまりこの被造物は神の栄光をあらわすものであり、神様は私たちがこの世にあって、喜ぶことができるようにと、この自然をつくってくださったのです。それゆえに私たちはこれらのすばらしい、美しい自然を愛すべきです。

二番目は「人間」です。ヨハネ 3 章 16 節「神は実に世を愛された。」とあります。ここで言っているのは、神様は私たちを愛してくださったということです。では、ヨハネは人間を愛してはいけないと言っているのでしょうか。それも違います。パウロはガラテヤ 6 章 10 節で「ですから、私たちは、機会あるたびに、すべての人に対して、特に信仰の家族の人たちに善を行いましょう。」と言っています。私たちは神様が彼らを愛しているがゆえに、私たちも同じ愛を持って、たとえその人たちがどのような人であったとしても、愛するべきです。

ヨハネが愛するなと言っているのは、悪魔によって支配されている世の中のシステムです。この世のシステムは、神様に明らかに反抗するものです。それゆえに神様を愛するものがこの世のシステムを愛することができない。世を愛することと神様を愛することは決して相いれることのできない正反対の位置にあるものです。

そしてヨハネがさらに加えるのは、世にあるものをもです。ここでは、この世とこの世のものが区別されていますが、世にあるものをもというのは実際の物ではなく、肉の欲、目の欲、暮し向きの自慢です。つまり物一つ一つではなく、その背後にある道徳的な価値について語っているわけです。この世を愛する、世的であるといったときは、私たちの態度が含まれてきます。私たちが何を思うのか、どのような態度を持っているかに焦点が当てられるべきです。

皆さんの中に、私はそのような世的な願いは持っていないとおっしゃる方がいるならば、私は同時に、ではそのような願いも持っていませんかと聞かなければなりません。ヨハネが問題にしているのは、私たちの行動だけではなく、どのような願いや思いを持って生きようとしているかです。ヨハネは、世をも世にあるものをも愛してはいけませんとはっきり言います。もし私たちが、この世の与える喜びや快楽をもって、私たち自身の思いを満たそうとするならば、私たちはこの世を愛していると言うのです。そして、それをするなとヨハネは私たちに命じるのです。

２．命令の説明　16 節

なぜ私たちが世を愛すべきではないのか――。ヨハネは 3 つの理由を教えています。

(1) 不可能なことだから。

15 節の後半、「もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。」とあります。この一番最後に出てくる「ありません」という否定の言葉をヨハネは一番最初に置いて、物すごく強調しています。この世を愛していながら、同時に神を愛することはできない。この考えはイエ

ス様がマタイ6章24節で人は「ふたりの主人に仕えることはできません。」と言ったことと非常に似ています。また、ヤコブの手紙の4章4節に「貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友となりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。」とあります。

なぜクリスチャンは世を愛するべきではないのでしょうか。この世のシステムは、私たち人間を罪へと誘惑するようにできているからです。ところが神は私たちのうちにキリストに似た者になるように、きよくなることを願っておられます。だから世を愛しながら、神を愛することは不可能なのです。サタンは人間を神から離れさせるために必要なシステムをしっかりと持っていて、私たちを誘惑しようとしています。だから、愛してはいけない。もし、あなたが救われているのなら、世を愛することは不可能です。だからその思いを断ち切りなさいと命令するわけです。

(2) 世が持っている特徴を見ればわかるから

ヨハネは16節で3つのことをもって、この世の特徴を説明します。「すべての世にあるもの、すなわち肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。」とあります。この一番最初には「なぜならば」という言葉を付け加えることができます。すべての世にあるものは、この3つのことで表されるというのです。

ａ． 肉の欲

「欲」という言葉は、強い願望、切望、欲望と訳すことができます。では、「肉」はというと、私たちが現在罪人であるがゆえに持っている性質を言っています。自分の必要を満たすことしか考えず、神をも要らないと言う性質です。

この肉についての戦いを、最もよくわかるように説明してくれているのはローマ７章で、私は神様の願っていることをしたいと思っているけれども、私の肉はそれをさせようとしないとパウロが告白しています。この「肉の欲」は、それが現実のものとして現れてくるとき、私たちの生涯にひどいことを起こさせます。

ガラテヤ５章19節に「肉の行いは明白であって、次のようなものです。」として、大きく分けて４つのことが書かれています。一つ目は不品行。夫婦外で持たれる性的行為、穢れ、私たちが実際に持つきよくない思い、行動そして好色です。二つ目は偶像礼拝、神様以外のものを崇める行為です。また、麻薬などを用いて私たちの考えを麻痺させるような魔術。三つ目に、対人関係において敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみなどです。四つ目は酩酊、遊興、さまざまな道楽にふける行動です。

そして、21節で、「こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。」と、パウロは、もし継続的にこのようなことを行い続けるならば、あなたはクリスチャンであるはずがない、神の子供ではないと言います。継続的にという言葉が強調されています。確かに、クリスチャンとして歩んでいても、私たちは罪を犯すことがあります。けれども、クリスチャンは、その行為を悪として認め、悔い改め、そこから立ち返り、そこに戻ることはしない。

なぜかというと、私たちは救われたときに聖霊を受けます。聖霊は、私たちに神様の願っておられることをしたいと願わせるからです。この世は私たちに対して、私たちの弱い部分にさまざまな攻撃をしかけてきます。私たちをさまざまな方法で神様から離れさせようとするのです。

ｂ． 目の欲

目の欲というのは、単に見ることによって生まれてくる欲望ではなく、私たちが頭の中で何かを想像して、それを見たい、それを欲しいと強く願ってしまう欲望です。また例えば、皆さんの好きじゃない人、嫌いな人がひどい目に遭えばいいのにという思いは、たとえそれが現実にならなくても、神の前に明らかに罪であり、目の欲です。

聖書の中でも、例えばヨシュア記７章１節～26節に出て来るアカンというは人、神様が聖絶しなさいと言った町で、聖絶すべき宝を見つけて自分の物として蓄えます。目の欲が行動となってあらわれた結果、彼の結末は裁きであり、死でした。もう一人、第２サムエル12章１節から17節、ダビデがバルコニーで水浴しているバテシバを見て、目の欲を持ち、その結果、生まれてくるべき子供は死に、殺人が犯され、ダビデの家に争いが絶えなくなり、自分の子供に命を狙われるようになりました。

イエス様は山上の説教の中で、心の中で情欲を持って女性を見るならば、あなたはもう姦淫を犯しているとお話になりました。片目で天国に入る方が両目で地獄で苦しむよりも幸いだから、もしあなたの目があなたをつまずかせるならば、その目を取り出してしまいなさいとも言われました。

特に私たちの生きている社会では、この目の欲に対して大いなる決断をもって変わろうとしないといけません。私たちの見るテレビを見てください。物欲だけではなく、性的なものや暴力的なものが描かれています。映画、雑誌、新聞、週刊誌、みんなそうです。社会は、私たちに必要のないものを買わせ

ようとします。新しいものが欲しい、きれいなものが欲しいという欲望に流されて買ってしまうならば、そこに目の欲を見つけることができます。

詩篇 119 編 37 節に「むなしいものを見ないように私の目をそらせ、あなたの道に私を生かしてください。」とあります。この世は私たちに空しいものを見るように仕向けます。ですから私たちは、みずからの欲望を満たすために物事を見たり、想像したりしてはいけません。そこには神様から私たちを遠ざけるわなが待っています。

ｃ．　暮らし向きの自慢

暮らし向きと訳されていますが、この言葉は、命と訳すことができます。命を支えるために必要なすべてのものに対する自慢です。人々はこの暮らし向きの自慢を非常に重要に思って生きています。個人的な誠実さ、正直さよりも人々からどう思われるかが重要なのです。この世は、私たちに自慢するように教えます。

けれども、私たちはそれらを大切なものと思ってはいけません。自慢の究極的な表れは、未信者の人たちがよく言う「私自身が神だ」という言葉です。ヨハネはまとめてこう言います。これらのものは、神から出たものではなく、この世から出たもので、私たちはそれらを愛してはいけない。それらを与えようとするこの世を、その世の中にあるものを愛してはならないと教えるわけです。

(3)　結末を見ればわかる　17 節

「世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。」とあります。この滅び去るという言葉は、現在進行形です。しかもこの動詞の形を見たときに、それはこの世とこの世の持っている欲は、そのもの自体の中にみずからが滅んでいくということがプログラムされているというのです。なぜならば、この世もこの世の欲もその基が神に置かれていないからです。

キリストが再びやって来られたときに、神様はこの世を裁かれ、新しい世を作られるとはっきりと私たちに約束しています。私たちはその時が現実になることを待ち望み、それが確実に近いことを覚えています。また、たとえ今現実にこの世が滅び去っていなかったとしても、ソロモンは、この世を求めて生きることがいかに空しいかを、「空なるかな、空なるかな」と教えています。神様を愛さずに、神様を第一とせずに生きる生き方がいかに空しいかは既に語られています。世が私たちに求めていることを行っていくとき、私たちに待っているものは滅びです。しかし、私たちが神を愛し、神が求めることを行っていくときに、私たちに約束されていることは、永遠の命であり、永遠の祝福です。絶対的な神への愛と世への愛の同居は不可能だということをヨハネははっきりと教えています。

私たちの神は愛の神です。けれども、神様が憎まれる愛があります。それは私たちが世を愛するときに持つ愛です。皆さんの愛はどちらに向けられていますか。もしこの世を愛していて、御霊が皆さんの心を責めるならば、どうか神の前に悔い改めてください。ヨハネは告白し、神の前に悔い改めるならば、私たちは神様によって赦されると約束しています。神様は、再び私たちを交わりへと加えてくださり、私たちをみこころを願って、行っていく者へとかえてくださいます。

もし、皆さんの心が責められずに大胆に神様の前に出ていくことができるならば、神様をほめたたえてください。そして、さらにこの神を愛する者になり続けてください。神様が私たちの持つ愛を喜んでくださることを心から願います。皆さんがそれを実践されることを心から祈ります。